

「劇あそび」の脚本 (二)

東京市麹町區富士見幼稚園

山村

よ

き

脚本(其の一)

「お花と蝶々」(年長
年少組女兒用)(約七分)

(登上人物)

花の精 { 朝 顔 五、六人
たんぼ 五、六人 } 蝶々 三羽
すみれ 五、六人

(仕度)

花の精にはそれ／＼の花の冠りをつけ蝶々には背に薄色の羽子
をつけ頭に觸手をつける

静かな音楽と同時に開幕(レコード使用)

舞臺の所々に三つの花の精が輪になつてしやがみ眠つてゐる、
しばらくして蝶々三羽が軽快なピアノの音につれて舞ひ出る、
自由に各々の花の間を舞ひ、ピアノが終ると同時に

蝶1「あゝくたびれた」

ミ云ひつ「朝顔のそばにしまる、蝶2羽もそばまで舞つ
て行きしまる

蝶2「私もくたびれてしまつたわ」

蝶3「私も」

蝶1「一諸に休みませう」

蝶2、3「えゝ」すぐこなりの朝顔を見て

蝶2「あら朝顔さんまだねむつてゐるわ」

蝶1、3「起してあげませうよ」

蝶2、3「聲を揃へて」

「朝顔さんお起きなさい、朝ですよ」

朝顔一同目をさまし聲を揃へて

「蝶々さんお早やう」

蝶2「朝顔さんすいぶんおねぼうさんね」

朝顔1「だつていゝ氣持ちだつたんですもの(一同を見渡し

て)ねえ……」

朝顔一同聲を揃へて「あゝいゝ氣持」ミ立ち上りつゝ圓形
になり手をつなぎたるまゝ、ぐる／＼まわる、ミ同時に

ピアノの音につれて蝶々三羽舞ひ出し舞ひながら

蝶1「あらたんぼゝさんもまだ眠つてゐるわ」

蝶2「又起してあげませうよ」

蝶3「え、早く〜」

「たんぼ、のそばまで舞つて行つてさまる、その間朝顔も蝶々のピアノに合せてまわつてゐる(終りまで)」

蝶1、2、3 聲を揃へて

「たんぼ、さん、お起きなさい朝ですよ」

たんぼ、聲を揃へて

「あら蝶々さん お早やう」

蝶1「たんぼ、さん、すいぶんおねぼうさんね」

たんぼ、1 他のたんぼ、を見渡しつゝ、

たんぼ、1「だつていゝ氣持ちだつたんですよのねえ…」

たんぼ、一同聲を揃へて「あゝいゝ氣持ち」云ひながら

立ちあがり朝顔と同じく輪になつてぐるぐるまわる、同時にピアノの音につれ蝶三羽また舞ひつゝ、

蝶1「あらすみれさんもまだねむつてゐるわ」

蝶2「また起してあげませうよ」

蝶3「え、早く〜」 前動作と同じ蝶三羽、聲を揃へて

「すみれさん、お起きなさい 朝ですよ」

すみれ一同目をさまし聲を揃へて

「あら蝶々さんお早やう」

蝶1「すみれさん、すいぶんおねぼうさんね」

すみれ1「だつていゝ氣持ちなんですもの、ねえ」

朝顔、たんぼ、と同じ動作をなしつゝ、

すみれ一同「あゝいゝ氣持ち」またぐるぐるまわる。その三つのお花の間を三羽の蝶またピアノの音に合せて自由に舞つてゐる時雨が降つて来る、(擬音、又はピアノで表す)蝶々三羽聲を揃へて、舞ひつゝ、

「雨が降つて来て 困つたわ〜」

朝顔一同まわりながら聲を揃へて

「蝶々さん 大丈夫よ〜」

たんぼ、まわりながら聲を揃へて

「私達のお花の中へいらつしやい」

すみれ、聲を揃へて(まわりながら)

「早く〜」

蝶1、2、3「さうもありがたう」

云ひつゝ三つのお花の中へそれぐかくれると同時に

お花はしやがんで、しぼんだ形をさる。と同時に始めの

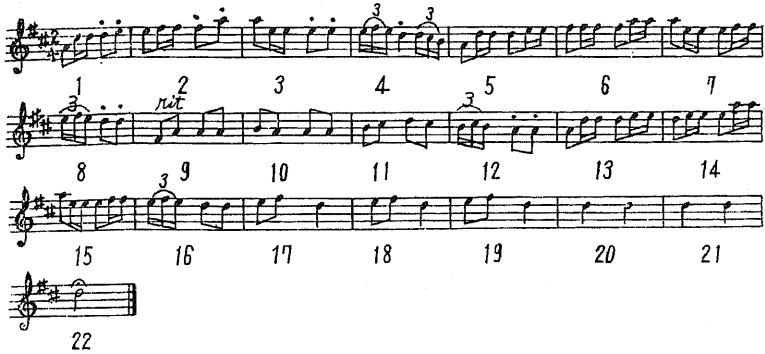
静かな音楽が(レコード)聞えて来る。

静かに終りの幕。

附。

これは去る七月の創立記念日をかねたお誕生祝會の折に私の組の女兒(二十一名)が演じた材料でございます、あまり簡單すぎますが四月入團した幼児も加つて全部で試みしたので丁度よい材料で御座いました、ことに暑さの折で御座いますから練習

蝶々の曲



- 1小節より8小節まで自由な舞ふ、
 9小節より12小節まで曲をゆるやかにして羽子をやすめる、
 13小節より16小節まで前と同じく自由に舞ふ、
 17小節より21小節までにとまるところまで静かに舞ひ、
 22小節で静止する。

脚本(其の二)

「金太郎」(年長年少組男児用)(約八分)
 (登上人物)
 金太郎
 熊(二匹)、兔(四匹)、鹿(三匹)、猿(四匹)
 (仕度)
 (金太郎)黒の模造紙に黄色の模造紙で「金」といふ字を表はした腹掛けをかけたせ手拭で後鉢巻をさせる、手にはホール紙で造つた斧を持たせる。
 (熊)(鹿)(兔)(猿)等はそれ／＼ホール紙で簡単に表はす。
 舞臺の一部分へ積木様のもので臺をこしらへそれにホール紙で木の切株を造り貼つて腰掛けられるやうにして置く。
 静かに幕が開くと、金太郎が斧をかついで舞臺の上手から意氣揚々として出て来る、舞臺を一廻りしながら(大きく)時々斧を

ふりあげて、

金「さつこいしよ〜」ミ木をきる真似をする。そして切株に腰かける

金「今日はまだお友達が誰も来ていなくてつまらないなあ」

「よし、いつものやうによんでやろう」ミ手に口をあて、舞臺の下手に向つて、

金「おーい〜」ミ呼ぶ、

熊「二匹四本足でのそり〜」ミ舞臺に表はれ金太郎の前に進む 聲を揃へて

熊「金太郎さん何か御用ですか」

金「あゝ、またいつものお角力をさろう」

熊2、「1」では皆を呼びませう」

金太郎は上手の方に向ひ、熊は下手の方に向つて「おーい」

「おーい」ミ呼ぶ

その聲につれて両方から、兎ははねながら、猿はスキップで舞臺に表はれ、金太郎の前に進む、聲を揃へて

一同「金太郎さん、何か御用ですか」

金「あゝ、又いつものお角力をさろう」

兎1「またお角力ですか、いやだなあー」

熊1「うさぎ君は又耳をひつぱられるミ困るからだろう」

熊2「お猿君もう耳なんてひつぱつてはいけないよ」

猿1「あゝ、大丈夫だよ」

兎2「金太郎さん、今日は向のお山までかけつくらをしませうよ」

兎一同「それがいゝ〜」

猿一同「さあやろ〜」ミさわぐ

金「あゝまだ鹿君が來ないじやないか」

熊1「あゝそうだ〜」

熊2「さあ、もう一度皆で呼んで見やう」

金太郎、熊、猿、兎、四方に向つて

「おーい、おーい」ミ呼ぶ

下手から鹿四本足で舞臺に表はれ金太郎の前に進む、聲を揃へて

鹿「金太郎さん何か御用ですか」

金「今日はみんなでお山までかけつくらをしやう」

鹿1「え、かけつくらですか」

鹿2、3「ちあ僕等が一等だ」

兎一同「一等は僕等だ〜」ミはねまわる

金「まあ待つた〜」ミ、

舞臺の上手に進み斧でラインをひいてから

金「ちあ一番始めに、鹿君ミ兎君だ」

金「ちやんミならんで〜」

鹿は四本足で、うさぎは二本足を揃へて並ぶ

金「よーい、さん……」

鹿は四本足でなるべく早く、兎は二本足でぴよん／＼はねながら舞臺の下手に消える。その間、熊、猿は一生懸命應援する。

熊、猿一同「鹿さんしつかり」「うさちゃんしつかり」

金「ごつちが勝つかなあ、もう見えなくなつちやつた」「さ

あ今度は僕、君等の番だよ」「ならんで〜」

熊1「金太郎さんご一緒ぢあ、ごてもかなわないなあ」「云ひつゝライン上にならぶ

熊2「一生懸命にやれば大丈夫だよ」並ぶ兎もびよん／＼はねながら並ぶ

金「ぢあ、僕は少し後からかけるよ」少し後退りする

金「よーい、ごん」

熊は四本足でのそり／＼歩き出し、猿はスキップで走り出し、金太郎は後からかけ出して早く舞臺の下手に消える、次におさるが消える、熊が二匹だん／＼早く歩きつゝ、熊1、2「金太郎さん待つて下さいよ／＼」「云ひながら舞臺から消えかゝつた處で

幕 終り

附

これも私の組の男児が（一年保育の）去る七月行つた材料で御座います。一年保育の幼児には、お話遊びの最初の物として試みたので御座いますが皆始めての事で大喜びでございました。しかし皆が金太郎になりたがりますので練習の時は毎日配役を替

へて「一番大きなお聲の出る人が金太郎さんになりませう」とはげまして見ました、したがつてお誕生會當日は女兒程上手には出来ませんでした。桃太郎牛若丸等この種のお話遊びは演じてゐるものは非常に愉快そうでございますが、見物して居ります子供は大して引きつけられませんでございますが、見物して居ります子供は大人の氣持ちを亂す心配が御座いますから、「時間」といふ事には相當考へを置かねばならぬ事で御座います。二學期になりましたら幼兒等もこの種の遊びになれてまゐります事と思はれますので、言葉等も案外らくに覺へられる事と思ひます、又いろ／＼の方面から材料を取つて見たいと思つて居ります、ごんな内容のものでも「劇をさせう」と云へば面白い程よく落ちついて受け取つてくれます。この「幼兒の氣持ち」を考へて内容方面及び取扱ひには充分な注意をはらつて研究して行き度いと思つて居ります。（昭和十三、八）